

エズラパウンドと能楽

堀 正 人

前掲の写真はローマのエリセオ劇場(Teatro Eliseo)の舞台裏におけるエズラ・パウンドのスナップである。時は昭和四十五年(一九七〇)六月十日の夜、日本能楽団(梅若万三郎团长)のヨーロッパ巡演の、最終日の公演の終了直後である。その時の詳しい情況については能楽団に同行した北岸佑吉氏が、同年七月二十二日の朝日新聞紙上に報告され、また同年九月号の雑誌「観世」に発表されている。同氏によれば、出演者全員が舞台にならんでお辞儀をすませて控室へ引揚げたとき、……アートディレクター(ジェラルド・ゲリエリ)が「エズラ・パウンドが来ました」と同氏を呼びに来たのに、氏は耳を疑うほどの驚きを覚えた、という。何しろ同氏は、その率直な言葉によれば、パウンドは「もうこの世にはない人のように思っていたのである」から。が、とに角パウンドの、梅若實の孫に会いたいという希望によるこの突然の楽屋訪問は、関係者一同に少からぬ驚きと興奮とを与えたことであろう。その時そこに居合わせ、能楽団一行中の観世流職分上田照也氏の門下の師範藤谷政二氏が撮影したカラー写真二葉(原写真はカラー、そして両者間に大差はな

い。)のうちの一つがすなわちこの写真である。再び北岸氏によれば、パウンドは万三郎氏と無言の握手を交した後、「さっさと劇場の裏口へ出てしまった」ということであるから、この電撃的訪問の記念写真は殆んど撮影不可能に近かったようである。実は藤谷氏以外にも一人撮った人があったが、それは失敗に終わったという。そうだとすればこれは恐らく当日の唯一の(ではないかも知れないが、ほぼそう言い得る)記念写真かと思われる。ただ万三郎氏との握手の場面の写っていないことは遺憾といえば遺憾であるが、それは望蜀の念に過ぎない。パウンドは、「六七年に万三郎氏が初めてロンドンで演能したのを見られなかったため、今度わざわざ出かけて初めて能の実演に接した」(北岸氏)のであるから、これはパウンド自身にとっても生涯の記念すべき写真である筈である。またわれわれはパウンドの老來の写真数葉を LES CAHIERS DE L'HERNE の Ezra Pound のうちに見、一九六九年四月の写真を Noel Stock の The Life of Ezra Pound の中に見出すのであるが、わたくしの知る限りにおいて、上掲の写真はパウンドの最近影であり、かつ

パウンドが深い興味をもち、大きい影響を受け、そしてそれを世界的に有名にするのに貢献した、われわれの古典芸術を鑑賞した後の、彼の風貌を伝える貴重な記録写真である。なお、最後にわたくし事を附記することを許されるならば、撮影者の藤谷政二氏はわたくしの一家の謡曲・仕舞の先生である。わたくしは同氏が拙宅へ来られる時、屢々談話のうちにエズラ・パウンドの名を口にした。が実を言うと、同氏はそれを半ば記し、半ば記せざるが如くであった。ところがテアトロ・エリセオの舞台裏にこの白頭の老人が姿を現わした時、氏はそれがわたくしの平生語る詩人であることを直感的に知って、スナップを撮られたという。そして六月二十九日、帰国後初めてわたくしの家へ来られた時、歐洲巡演の土産話とともに、「これがあなたをよく話される詩人です」と言って氏が示されたのがこの写真であり、それは紛うかたなきエズラ・パウンドであった。この写真をここに掲載するに際して、わたくしは、この写真撮影に当研究所においてパウンド研究に従事しているわたくし自身が不思議なかかわりを持った幸福な偶然に驚きつつ、それを撮影し、提供して下さった藤谷政二氏に深甚なる感謝の意を表するものである。

Ernest Fenollosa (1853—1908) の末っ子 Mary からその夫の遺稿管理の委嘱を受けた Ezra Pound が、その遺稿の一部分を手交され、また他の一部分をロンドンで Mary が発送したのを落手し

たのは一九一三年の末であった。Mary はなおその残りの部分を一九一五年十一月、Alabama からパウンドのもとに郵送した。それらは全部で約十六冊のノートブックから成り、東洋文学に関する覚書、中国詩の翻訳草稿、及び The Chinese Written Character as a Medium for Poetry (詩の媒体としての漢字に関する試論) であった。①。パウンドはそれらを携えて Stone Cottage に赴き、一九一三—一四年の冬の間、その整理に取りかかった。そして彼がまず最初に手を着けたのが能であって、一九一四年一月三十一日、彼は Harriet Monroe (1860—1936) 宛にフェノロサ訳(あるいは、それに基く) Nishiki (錦木) を送り届け、更に三月二十八日附の書翰で Harriet Monroe にその価値を強調している。②。そしてそれはモノロー編集の Poetry 誌の同年五月号に発表された。③。彼はなお続いてフェノロサのノートブックの整理に没頭し、ロンドンの Quarterly Review 十月号に Kinuta (楯) Higoromo (羽衣) の訳を発表した。④。同時に中国詩(主として李太白の詩)の訳に英詩としての雕琢を加え、一九一五年四月六日、三十二頁の小冊子の形で Elkin Mathews から出版されたのが有名な Cathay である。⑤。パウンドは更にフェノロサの遺稿出版を期して Yale University Press に交渉し、一九一五年十二月相手方もフェノロサに好意的であるように思えたが、その話はいいに不成功に終わった。⑥。それはフェノロサに対する米国一般社会の、その離婚問題に関する偏見に多少とも基づいていたのだろうか。だがパウンドは一九一六年前半においても

フェノロサのノートブックの仕事に熱中し、さらに四篇の中国詩の翻訳を試みるとともに、同年九月十六日アイルランド、ダブリン州、Dandrum, Churchtown の Cuala Press から能楽に関する書物を出版した^⑤。それは Certain Noble Plays of Japan と題せられ、上述の「錦木」「羽衣」のほか「熊坂」（本書の後記に従えば、「The Drama」誌に掲載されたもの）及び「景清」の訳を収め、有名な W. B. Yeats の序文を冠したもので、書名の下に From the Manuscript of Ernest Fenollosa, Chosen and Finished by Ezra Pound with an Introduction by William Butler Yeats という附記があり、また後記に “Printed and Published by Elizabeth Corbet Yeats……Finished on the Twentieth Day of July, in the Year of the Sinn Fein Rising, Nineteen Hundred and Sixteen” とある。なぞこの書名に於いて、能を noble play と呼んでいることは、能に対するフェノロサの意見を強く反映しているものと思われる^⑥。

パウンドはさらに同年、イェーツからロンドンのマクミラン社に紹介され、同社から ‘Noh’ or Accomplishment を出版した^⑦。それは A Study of the Classical Stage of Japan の附記があり、 “by Ernest Fenollosa and Ezra Pound” と書かれ、巻頭に東京 Nakajima 撮影の梅若實（初代）の写真が掲げられている。

パウンドはこの書の緒言に、「散文の部分においては私はただ遺稿管理人の役割を果たしたに過ぎない。劇の部分では、私の仕事は、

骨の折れる仕事はすべてやって貰って、美を言葉に排列する喜びをもつだけの翻訳者の役割だった。」と書いている。全巻、三部に分たれ、第一部はパウンド自身の序論に始まり^⑧（勿論散文ではあるがフェノロサの資料によって書かれたもの）「卒都婆小町」「通小町」「須磨源氏」の訳、梅若實（初代）聞書（口伝・装束・面・謡・舞台等）を含み、第二部は「熊坂」の解説と訳、「狸々」「田村」「経正^⑨」、第三部はフェノロサの能に関する解説と「錦木」「砧」「羽衣」「景清」の訳等を収め、第四部は「葵上」「杜若」（これらの解説はパウンド自身の意見の強く出ているものであるが）「張良」「弦上」の訳から成っている。なおその附録として、その第一部には「俊寛」「恋重荷」「鉄輪」「松風」の梗概を述べ、第二部には小中村清矩 (Kō-hakamura と誤記^⑩) の著書（歌舞音楽略史）に基く日本音楽史の略説があり、第三部には能衣裳に関する梅若實の談話を載せ、そして第四部としてフェノロサの五線譜に記録した「羽衣」の楽譜（「風早の」より「小舟かな」まで、「涙の露の玉鬘」より「空に吹くまで懐かしや」まで、「東遊の駿河舞」より「世に伝えたる曲とかや」まで、及び「春霞」より最後まで）を添えている。

ところがこの書はその発刊以来四十二年後一九五九年ニューヨークの New Directions 出版社から New Directions Paperback No. 79 として The Classic Noh Theatre of Japan という題名で出版された。これは現代においてもなお、（或は一層）この書に対する読書界の要望の存在することを示しているものであるが、この新版

は、巻末に Certain Noble Plays of Japan の W. B. イエーツの序文を添えているので、一般読者に、欧米における能楽研究または能楽研究史上の古典への接近を容易ならしめる便利な書物である。

全体として 'Noh' or Accomplishment そのままの覆刻と言え、多少の相違がないわけではない。梅若實の写真のないことは廉価本としてやむを得ないためであろうが、「羽衣」の楽譜を除いたのは、それを事実上無意味なものと考えたパウンドの見識に因るのもあろう。Noel Stock の The Life of Ezra Pound にはこの書

の出版についての記述を欠いているが、この廉価本の発刊に関してパウンドが全然タッチしなかったものとは考えられない。それはこの書には 'Noh' or Accomplishment における体裁上の不統一を整理したところがあり、またさきにパウンドの署名のなかった文章に新しく署名を加えているところがあるからである。パウンドは一九二七年にもフェノロサの能楽研究資料の新版の刊行を希望し、この方面の知識を具えた適当な日本の学者の協力を得て、その正確さが保証されれば、それは標準的著作になり得るとの確信の下に、ワシントン大学 (Seattle) の Glenn Hughes に交渉したことがある。そしてパウンドはもし Hughes の方で出来なければ、Harper 社または Scribners 社にその提案を持ち込むつもりであった。彼のこの意図はついに実現を見るに至らなかったが、彼の能楽に対する関心の当ても燃え続けていたことをこの事実は証明している。Donald Davie がその著 Ezra Pound: Poet as Sculptor に引用している

パウンドの書翰において、一九一八年にパウンドは「能のためにあんなに時間を費したことをわたくしはよいことだと思っている。がこれ位で結構だと思ふ」と書いているが、一九三四、三五年に彼は更に T. S. Eliot 及び C. K. Ogden に、フェノロサに対する興味を喚起しようと努力している。これは能だけに限定されたことではなかったとしても、パウンドの能に対する関心はフェノロサと結びついて、その時点においても持ち続けられていたといつてよいと思う。

もちろんパウンドの能楽の解説、謡曲の翻訳は先駆者的冒険といふべきものであった。彼以前にこの領域の探求・紹介を試みたものとして、欧米において W. G. Aston 以来 F. Brinkley, F. V. Dickins, Karl Florenz, Michel Revon, Noël Peri, George Sanson 等として Marie Stopes 等の名を挙げ得るのであるが、それらは決してパウンドに未知の世界の詳細な地図を提供してくれるものではなかった。(もし詳細な地図があったらパウンドがあれ程の熱意をもってこの冒険に乗出したかどうかは不明であるし、またそれがあったとしても彼は彼らしい道しか行かなかつたかも知れない。) その上彼の周囲には彼を助ける十分な相談相手もなかったのである。彼は日本の舞踊家 Michio Ito (伊藤道郎) に好意を持ち、ロンドンのケンジントンの 10 Church Walk の彼の部屋に寄寓させていたことがあり、それがパウンドの日本文化に対する興味の一因となつたともいわれる。が伊藤は離日以前能楽に関する知識は持っていなかったの

である。結局パウンドは、彼に委嘱されたフェノロサのノートブックによって能を理解し、それを彼の立場において完成しようとする努力したと言ふべきであらう。

ではそのフェノロサのノートブックの能楽に関する部分は果してどのようなものか。残念なことに、現在それはある法律的理由のために Committee for Ezra Pound によって seal されてしまつて殆ど見ることが許されていないので、その実体を窺うことが出来ない。だがそれにも拘らず中国詩に関する部分は幸いにしてフェノロサのノートの実体とともに、パウンドのそれに対してとつた方法もほぼ見当がつくのであるが、能楽の場合においてはそれが今なお不可能である。先年児玉実英氏はフェノロサのノート六冊分を読むことを得てその貴重な報告を発表されたのであるが、殆んど全部それは中国詩に関するもので、能楽関係のものは、ノートの第二冊目の「おわりに“Matsukaze”といふ見出しで能の紹介と英訳が走り書きなれり」あり、それは「のちハムンドが、‘Noh’ Plays の“Appendix I”で使つたものと思われる」といふ箇所があるだけである。その「英訳」がどのようなものであるか解らないが、それについて幾分の、しかしわれわれにとって非常に有益な光りを投げかけてくれるものは、Roy E. Teele 氏の Translations of Noh Plays によつて紹介された Journal of the American Oriental Society にフェノロサの発表した論文中の「砧」の一節の訳である。

The colour of the moon, the breath-colour of the wind:

ハムンドと能楽(堀)

Even to the point of frost gathering in the shadow,

The sound of cloth-beating, storms at night.

The cry of sorrow, the hum of insects,

Of these all composed into a falling tear-dew,

“Horo, horo, hara, hara,” whispering;

Which of all these is the sound of the cloth-beating?

これは言うまでもなく、「月の色風の気色、影に置く霜までも心
妻を折節に、砧の音、夜嵐、悲しみの声、虫の音、交りて落つる露
涙、ほろほろはらはらと、いづれ砧の音やうた」に当る部分であ
り、その中の「気色」の訳“breath-colour”に對して Teele 氏
は批判を加えているが、とに角それは、フェノロサが中国詩の訳の
ノートにおいて一字毎に訳語を書き附けているのと同じの態度であ
る点、われわれにとって甚だ興味深いものがある。またハムンドの
この一節の訳は“……the colour of the moon, the breath-colour
of the wind, even the points of frost that assemble in the
shadow. A time that brings awe to the heart, a sound of
beaten cloths, and storms in the night, a crying in the storm,
a sad sound of the crickets, make one sound in the falling
dew, a whispering lamentation, hera, hera, a sound in the
cloth of beauty. どうのびあつて、上のフェノロサの訳からな
り自由なものでありながら、“breath-colour”といふ英語として
奇異な言葉がそのまゝ残されてゐるが、ハムンドの言葉だ

対する特別の興味を示しているのかも知れないが、——というのは「羽衣」にもこの言葉は保存されているからであるが、——パウンド訳がフェノロサの原訳の面影を時によっては細部においても留めていることの一証左と言い得る。

だが Teele 氏は、上述のフェノロサの「砧」の訳がフェノロサの謡曲の訳の全体の調子あるいは水準をあらわすものとは考えていない。それは発表のために特に推敲されたもので、ノートの訳はもっと覚書風のものに止まっているであろうと推測されるからである。また同氏はその犀利な研究においてフェノロサの原訳は全体として、断片的なものであらうと想定している。特に省略のあることを断っている「田村」だけではなく、「卒都婆小町」「通小町」は、所謂フェノロサ・パウンド訳では原作の三分の一より短く、「弦上」「須磨源氏」も三分の一は訳出されていない。また「景清」の省略の中には重大なものが落されており、「杜若」に至っては原文から余りにも逸脱している。そして同氏は、梅若竹世（二代夷）から直接聞いた話によって、フェノロサの謡曲の稽古が主として小謡の稽古であった事実を、フェノロサの謡曲の断片性と、そしてその結果としてのフェノロサ・パウンド訳の遺漏とに結びつけて考えるのである。また「葵上」の解説の誤りは、Teele 氏も触れているが、これはフェノロサに責任を負わせることの出来ないもので、「これには弁解の余地がない」と Earl Miner 氏も言っている。^⑤だが率直なパウンドは、「次に『葵上』『杜若』の二つの劇をお目

にかけるが、甚だ心許ない。それはどうも解りにくいものだと自分も思う。日本人とそれらについて問答を重ねて見たが彼等も大して頼りにならなかつた。」と最初から自ら認めているのである。^⑥

だが、こうした欠点のゆえに、Donald Davie の言う通り、Arthur Waley の訳が出て以来、フェノロサ・パウンドの共訳は学問的に時代遅れのものとなつたかも知れないが、英詩としての視点からは決してそうではない。彼は謡曲の翻譯において、ウエイリィのように Gerard Manley Hopkins の奇抜な措辞を利用するようなことはしなかつたけれども、彼はつとめて古臭いヴィクトリア朝風の用語を訳文から除去したと自ら語っている。イエーツが、その訳を見た時、その英文学における最高の輪廓の明晰な美しさに打たれて「これこそわたしが一生探し求めていたものだ」と叫んだといふのも偶然ではない。「タイムス文芸附録」は「Noh' or Ac-complishment の批評において、パウンドの措辞の妙と心憎いまでの文章のリズムを賞讃した。だがもちろん彼の英文学あるいは英米文学への貢献はそれだけではない。それは謡曲、日本文学の翻譯を通じて、西洋の文学・文化に新しい美を伝えたことにある。たとえば、——

The stag's voice has bent her heart toward sorrow,

Sending the evening winds which she does not see,

We cannot see the tip of the branch.

The last leaf falls without witness.

There is an awe in the shadow,
And even the moon is quiet,

With the love-grass under the eaves.

これは Noel Stock 氏の “The Life of Ezra Pound” 中に引用している「砧」の「牡鹿の声も心凄く、見ぬ山風を送り来て、梢はいづれ一葉散る、空すさまじき月影の、軒の忍に映るひて」という一節に当るのであるが、訳として必ずしも正確ではないとしても、そこに展開されているのは “Cathay” の “The Jewel Stairs” (Grievance) (李太白の玉階怨) の世界ではなく、まして英文学本来の分野の感覚ではなく、それは正しく日本文学、特に中世文学独特の情景である。パウンドの鋭い感受性はフェノロサのノートによりつつ、その近代的表現を通して、中世日本の美の贈物を近代西洋に捧げたと言える。

なお Donald Davie は「錦木」の訳の中の “Names of Love, Now for a little spell, / For a faint charm only, ……” という箇所における “spell” という言葉の「しゃれ」に似た用法を指摘して、日本の原典にかかるものがあるとは信じ難いと言っているが、実は「錦木」の原文にこれに該当する言葉そのものは発見されないけれども、謡曲の詞章が一種の「しゃれ」である掛言葉や縁語でつなぎ合わされた美しい鎖のようなものであることをパウンドは心得ていたであろう。その点にフェノロサのノートは触れているかどうかかわらないけれども、Teale 氏は A. B. Mitford の Tales

エズラパウンドと能楽(堀)

of Old Japan (1871) に謡曲が「しゃれ」や言葉の遊戯のために「全然不可解」であるという言及のあることを述べている。パウンドは「錦木」において、その謡曲の特質の一端を窺わせようと試みたものであろうか。

ともあれパウンドの洞察力の鋭さの最も発揮されているのは彼の能楽観である。「能は感情のうちにその統一を持っている。それはまた、われわれが『イメージの統一』と呼んでいいものをも持っている。少くともその傑作に属するものはすべて一つのイメージを強めるように構成されている。」と彼は書いている。彼にとって終始一貫、「イメージとは一瞬間における知的・感情的複合体を現わすものであり、同時にその表出こそは、突如として訪れる解放感、時間・空間の制限からの自由の感覚、最大の芸術に接した時に味う、一挙に生長を遂げた感覚を与えるもの」であった。そして彼はすでにわれわれの俳句を考察して、それを「単一のイメージの詩」(one-image poem) の極致と見ていたのであったが、彼は能楽のうちに同様のものを発見したのである。彼のこの能楽観に対して異論や疑問を提出することは必ずしも困難ではないとしても、それが能楽のみならず、日本文化の本質についてさえ、われわれに教え、少くとも示唆する所の多いものであることが出来ない。更にパウンドにおいて敬服すべきは、彼が以上のような能楽観を持ちつつ、一方において、能楽のもつ他の性格を見抜いていたことである。それは明晰に彫り出された一元性(もちろんそれは通俗的意味における単

純性ではないが)を尊重する Imagism とはむしろ反対の、幽晦な捕捉し難い、二元性を基調とした Symbolism 的なものがそこに包蔵されていることを看取していたことである。上掲の「錦木」の部分を含む一節の難解さは、(原文はそれ程難解なものではないが)能楽の原文に対するパウンドの無理解よりも、能楽の性格の如上の面に対する彼の直感のあらわれであると言えないであろうか。しかし、それはまた彼の「能には素晴らしい箇所のあることは認める。だがそれはいやらしい程柔い。Pater や Fiona Macleod や James Matthew Barrie のように、満足し兼ねるものがある」という言葉と関係があるように思われる。

だがそれにも拘らず、パウンドの能楽に対する関心と愛は一生を通じて変わっていない。あるいはその程度は時によって変わっているかも知れないけれども、Earl Miner の言っているように、一九二一年から一七年にわたる時代は彼の俳句と能に対する熱情の最初の燃焼期であり、三十年代四十年代はその再燃期であり、近年彼は更に能楽の劇形式上の重要性を主張しているが、ついに「能の内容は、『トラキスの女たち』を除いて、ギリシヤ悲劇よりも興味深いものだ」とさえ言うに至っている。とすれば、彼の能に対する態度は終始不変であったと言える。また能楽の彼に与えた影響の大きかったことに就いては、これまた Miner 氏の指摘している所であるが、その詳述は別の機会に譲ることにしたい。

さて最後に、——一九五六年、パウンドはその「トラキスの女た

ち」(Women of Trachis)の訳を試みて北園克衛に贈り、それを伊藤道郎とともに梅若實(二代)がそのレパトリーに加えることを承諾してくれるなら、the Minoru にこれを呈するようにと希望している。梅若實は彼にとって終生忘れることの出来ない名前だったのである。何故なら、フェノロサが謡曲の指導を受けたのは当時竹世と名乗っていた梅若實(二代)であり、また彼に謡曲の指導のほかに、能楽の精神と歴史についてつづさに語ったのは初代の梅若實であつて、「Noh' or Accomplishment」という書物は梅若實なしにはおそらく存在し得なかつたからである。同書の中に如何に屢々梅若實の名が繰返されていることであろう。その巻頭に實の写真が掲げられていることは、その写真の出処とともに、フェノロサの遺志によるものかどうか、明かでないが、遺稿管理人としてまた共著者としてのパウンドの意見がそこにはっきり出ていることは疑えないと思う。パウンドは Mr. James Joyce and the Modern Stage: A Play and Some Considerations (1916)のなかで、「サラマンナルの芸術を論じて、「彼女はイメジを、少くともわたくしにとつて、今までに見た如何なる彫刻のそれよりも永続的なイメジを、創造した」と言い、それに続けて、「ここに一つの芸術がある。梅若實を捕えたであろう一つの芸術、偉大なる演技があつた」と書いて、その一章を結んでいる。ローマのテアトロ・エリセオの舞台裏に、「梅若實の孫に会いたい」と言つて、パウンドが突然姿を現わしたことは、彼の能楽とともに梅若實に対する生涯変らない関心・敬意

を示すものであったと言えるのである。

以上の一文はエリセオ劇場における Ezra Pound の写真について、その突然の訪問が、実は偶発的なものでなく、深い意味を持っていたこと、そしてこの写真はその意味深い訪問の貴重な記録であることを明かにしようとしたものである。同時に「Noh' or Accomplishment」の巻頭の梅若實の写真が、この人に対する著者の敬意の表れでもあるとすれば、それと同様に、この写真がわれわれの古典芸術を世界的に有名にすることに貢献し、われわれの研究に大きな示唆をさえた詩人に対するわれわれの感謝のしるしとなり得れば、それはわたくしの欣幸に堪えないところである。

註

- ① Noel Stock: *The Life of Ezra Pound* (Routledge and Kegan Paul, London, 1970), p. 148. なお Fenollosa 未亡人がパウンドと相知り、パウンドの遺稿管理を委嘱するに至る経緯については同説に關しつゝ Lawrence W. Chisolm: *Fenollosa: The Far East and American Culture* (Yale University Press, 1963), p. 222 参照。* 又 T. S. Eliot: *To Criticise the Critic* (Faber and Faber, 1965), p. 177 参照。
- ② Noel Stock: *The Life of Ezra Pound*, p. 149.
- ③ *Ibid.*, p. 156.
- ④ *Ibid.*, p. 149, p. 160.

エズラパウンドと能楽(堀)

- ⑤ *Ibid.*, p. 167. *The Classical Drama of Japan* (Edited from Ernest Fenollosa's manuscripts by Ezra Pound). *Quarterly Review*, Oct. 1914. それは「敦盛」「錦木」の抜粋と「砧」「羽衣」の全曲を収めている。「敦盛」「錦木」の「Quotations」を *A Bibliography of Ezra Pound*, p. 209 にあり、「錦木」については再び同書 p. 45 に summarized されている。
- ⑥ *Ibid.*, pp. 167—175.
- ⑦ *Ibid.*, p. 185.
- ⑧ *Ibid.*, p. 196 参照。虚照郷の長安古意及び郭璞の遊仙詩による“Old Idea of Chuan,” “Sennin Poem” を含むその四篇は“Lustra”の“Cathay” section に収録 (*Ibid.*)。なお Ezra Pound: *Collected Shorter Poems* (Faber and Faber), pp. 149—152 参照。
- ⑨ この書は三五〇部発行せられ、わたくしが見ることを得たのは、国立国会図書館(旧帝國図書館)所蔵「大正7.1.18購求」(一九一八)の捺印あるもの、三百五十部中の第十九部なる由の記入がある。なお本書の出版年時は Donald Gallup: *A Bibliography of Ezra Pound* (Rupert Hart-Davis, London, 1963) に従った。また N. Stock: *The Life of E. P.*, p. 196 参照。但氏は何故かこの書名を *書を編ぶ* とした。
- ⑩ 一九一五年五月、ニカチの“Drama”誌に載せた“The Classical Stage of Japan: Ernest Fenollosa's Work on the Japanese ‘Noh’,” Edited by Ezra Pound の中を収録したものを (Donald Gallup: *A Bibliography of E. P.* 参照)。
- ⑪ この巻のついでに *The Classic Noh Theatre of Japan*, by Ezra

Pound and Ernest Fenollosa (A New Directions Paperbook, 1959), p. 28, p. 61 を参照された。そこにはフェノロサの日本芸術史における好尚と相通するものがあるが、同時に梅若実の見解の反映も多分に見られると思う。また古川久・「明治能楽史序説」(わんや書店 昭和四四年三月) 一九六頁参照。

⑮ 本書の出版年次は一九一六年と印刷されているが、実は一九一七年一月十二日に発行された。(A Bibliography of E. P. 及び N. Stock: The Life, p. 199 参照。)この書は米国のちかづきは一九一七年六月 Alfred A. Knopf から発行された。但わたくしの見るところの出来たのは関西大学図書館所蔵の英国版で、米国版は未見である。

⑯ この序論は 'Noh' or Accomplishment とあつては署名がないが、The Classic Noh Theatre of Japan とは文末で「マン」の名が記されている。

⑰ 以上の諸曲併に梅若実聞書は註10に挙げたものに基づいて再録したものである。(A Bibliography of E. P. pp. 211, 212 参照)

⑱ 「錦木」「羽衣」「景清」は Certain Noble Plays of Japan 446、
「世」は The Classical Drama of Japan, Quarterly Review, Oct, 1914 44の再録。

⑲ この書に日本の人名、地名その他日本語の romanization と誤りのかなりあるのは一つにはフェノロサの算書ぎの文字の難読によるものであろう。例えば梅津が Umegu となり、九州が Kinshu、大和建樹が Takeki Owada、ちかづきが Mikokoshi、邯鄲が Kontan、極楽が Gobusaki などのようにが如くである。また Sasuma は Satsuma 薩

摩である。しかして日本語の誤記の少くなくのは「マン」の書に限られたりである。Chisom の Fenollosa: The Far East and American Culture とあつては相違多数と発見される。その一節は又富貴氏の Fenollosa and American Dream (Japan Quarterly, Bk. II, vol. 3, July-Sept, 1964) にも転載されている通りである。

⑳ 'Noh' or Accomplishment p. 257. の「マン」の見解参照。この点に「つた」「つた」E. S. Morse が「マン」の同意見である。E. S. Morse: Japan Day by Day, Vol. II p. 401. 「日本その日の日」(東洋文庫)第三卷107頁参照。(補々)

㉑ 'Noh' or Accomplishment とあつては「経王」「錦木」「世」「羽衣」「景清」「葵子」「杜若」「張良」「綾子」の訳の最後は FINIS へ記し、「通小曲」「須磨源氏」「熊坂」「狸々」「田村」の訳では The End へ記してあるが、The Classic Noh Theatre of Japan とあつてはこれらの文字を一様に削り去っている。

㉒ Noel Stock: The Life of E. P. pp. 269—270. 若崎良三氏の「Ezra Pound の Fenollosa papers」(英語青年 一九六七年一月号 一五頁)を参照。

㉓ Op. cit. p. 53.

㉔ Noel Stock: The Life of E. P. pp. 324—5.

㉕ Roy E. Teele: Translations of Noh Plays (Comparative Literature, Vol. IX, No. 4 (Fall 1957).

㉖ Noel Stock: The Life of E. P. pp. 185—6. この節題の字彙・地図
を Patricia Hutchins: Ezra Pound's Kensington (Faber and

Faber, 1965) と収録。

② Michael Reck: *Ezra Pound—A Close-up* (McGraw-Hill Book Co., 1967), p. 96. 以下「大分町の虫樂無題の詩集」D. J. Gordon: *W. B. Yeats—Images of a Poet* (Manchester University Press, 1961) pp. 70, 71 と題名が一致する。

③ Wai-lim Yip: *Ezra Pounds Cathay*, p. VII 参照。

④ *Ibid.*, pp. VII, VIII.

⑤ 尾玉実英「ペンソンの謎々 “Fenollosa MSS”」(英語青年 一九六九年四月号)。

⑥ Roy E. Teele: *Translations of Noh Plays* (Comparative Literature, Vol. IX, No. 4 (Fall 1957), pp. 349—50.

⑦ 「草木」の「ちび長閑かなる睡ごまや 春のたけ松原の波たが舞へ朝霞」にせよ「A Clean and pleasant time surely. There comes the breath-colour of spring; the waves rise in a line below the early mist; ……」と云ふ訳なすやふべし。

⑧ Earl Miner: *The Japanese Tradition in British and American Literature* (Princeton University Press, 1958), p. 137. ノンロカのノートでは六条御息所の生霊が葵上を悩ました明記してあるに拘らず、パウンドはそれを葵上の六条御息所に対する嫉妬心のあらわれとしたのである。またパウンドは「車争い」にぶつて屈辱を受けたのは六条御息所でなく、葵上だと思つたのである。(The Classic Noh Theatre of Japan, p. 115.)

⑨ The Classic Noh Theatre of Japan, p. 113.

エズラパウンドと能楽(拙)

⑩ Donald Davie: *Ezra Pound, Poet as Sculptor*, p. 53.

⑪ *Ibid.*

⑫ Michael Reck: *Ezra Pound, A Close-up*, p. 22.

⑬ *Ibid.*

⑭ T. S. Eliot “Ezra Pound: His Metric and Poetry”, *To Criticise the Critic* (Faber and Faber, 1965), p. 182 参照。

⑮ *Op. cit.*, 167.

⑯ Ezra Pound: *Collected Shorter Poems* (Faber and Faber), p. 142 参照。

⑰ Donald Davie: *Ezra Pound, Poet as Sculptor*, p. 52 参照。

⑱ Roy E. Teele: *Translations of Noh Plays*, (Comparative Literature, Vol. IX, No. 4, p. 345.

⑲ The Classic Noh Theatre of Japan, p. 27.

⑳ Literary Essays of Ezra Pound, edited with an Introduction by T. S. Eliot (Faber and Faber, 1954), p. 3. A Few Don't by an Imagist (Poetry, I. 6. March, 1913). 参 Earl Miner: *The Japanese Tradition in British and American Literature*, p. 125 参照。

㉑ Earl Miner, 前掲書 一一四—一五頁。また同書一一四頁、一四〇頁 参照。

㉒ Donald Davie, 前掲書同頁参照。Davie の謡曲に「こやれ」に似た言語の遊戯などは見出せないうという推測は誤っているが、それも拘らず、彼の謡曲の Symbolism 的な面を指摘して、問題を提起してゐる点は非常に興味深い。

- ④ Donald Davie, 前掲書 五三頁。
 ⑤ Earl Miner, 前掲書 一五四頁。
 ⑥ 同書 一四一頁—一五四頁。
 ⑦ Op. cit. A Bibliography of E. P., p. 118.
 ⑧ The Classic Noh Stage of Japan 参照。なお古川久・明治能楽史序説の「フェノロサと梅若実」はこの点に関する極めて有益な研究である。
 ⑨ The Classic Noh Stage of Japan, pp. 5, 15, 27, 29, 33, 34, 149.
 ⑩ The Letters of Ezra Pound to James Joyce, with Pound's Essays on Joyce, Edited by Forrest Read (Faber and Faber, 1968) p. 53.

補注

- ① 更に The Classic Noh Theatre of Japan, p. 21 には、「葵上を含む数番の能が一九三九年までに発声映画に撮られたが、これが目下のところ、日本で正しく演じられるのを見る以外、この芸術の全貌の幾分を伝える唯一の方法である。」という註記があるが、それは 'Noh' or Accomplishment とは全く、恐らくハムレットの書き添えたものである。

- ② 'Noh' or Accomplishment, p. 47 に、「外人の中で今までに能楽の稽古をしたものは Mosse とわたくしと二人だけであるが、現在それをやっている外人はわたくし一人である。」という、一八九八年十二月二十日のフェノロサの筆録の一節が見られるが、この Mosse は Morse すなわち Edward Sylvester Morse その人であらう。この誤りは The Classic Noh Theatre of Japan に受け継がれている。(同書 二八頁)筆者は 'Noh' or Accomplishment の米国版を見ていないが、

Van Wyck Brooks はその著 Fenollosa and his Circle (E. P. Dutton, 1962) p. 34 に以上の文を引用するに当り、Mosse を Morse としている。なお、フェノロサ、モース、梅若実の関係については註⑧に記載の古川久氏の研究参照。